

平成9年度

コミュニケーション能力の育成に関する 指導法の研究

— 課題解決学習 (TASK-ORIENTED ACTIVITIES) を
通じて効果的な評価を探る —

川崎市総合教育センター 英語科研究会議

コミュニケーション能力の育成に関する指導法の研究

— 課題解決学習 (TASK-ORIENTED ACTIVITIES) を通じて効果的な評価を探る —

英語科研究会議

佐藤 博子¹ 浅沼 得徳² 伊藤 敏明³ 中井 紀子⁴ 朝倉 安弘⁵

要 約

目ざましい情報網の発達や、世界状況の変化に対応すべく、英語をコミュニケーションの手段として用いることのできる生徒の育成が、外国語（英語）科に求められている。英語科では、この目標に迫るため様々な指導法が考案され試みられているものの、未だに文法や文型を知識として教え込む授業が多いのが現状である。

本研究会議では、コミュニケーション能力を育成するために、今まで行ってきた学習で不足することは何かを考えた。その結果、英語を使わざるをえない「場」の設定をし、生徒に必要な英語を自分で考えさせるチャンスを与えてこなかったのではないかと、ということに着目し、前研究で打ち出された成果をうけて「課題解決学習」という指導法をとり入れることにした。そして、この学習過程において、的確な評価を行えば生徒の学習意欲の向上につながり、コミュニケーション能力の育成を促すであろうという仮説を立て、検証授業に臨んだ。

また、課題解決学習を円滑に進めるため、学習のプログラム化を考案し提示した。次にプログラム化された計画に基づいて授業を行ってみた。更に、学習の定着化・およびレベルアップ化をはかるため「振り返り学習」を考案し、実施した。そして、この学習方法を用いることで、コミュニケーション能力（談話能力・方略的能力）の向上がどの程度観られるのかを、評価規準を設定し、Speaking Testを実施することで観察してみた。さらにそれぞれの学習活動に対して、生徒に自ら学ぶ意欲を持たせるために必要な評価の工夫にも挑戦した。

その結果、英語を学ぶ意義を見だし、具体的な学習目標を自分で考える生徒が増加していることをみとることができた。これは、やがて生涯学習にも繋がるのではないかと考えている。

今後の課題として、まず、課題解決学習のカリキュラム化をはかること、そして学習意欲の向上を促進するための、より客観的な評価の完成を目指し、さらに研究が必要であることが上げられる。

キーワード：英語教育，コミュニケーション，課題解決学習，振り返り学習，Speaking Test，評価，

目 次

I 主題設定の理由	98	3. 検証授業でみとることのできる生徒の変容	108
1. 英語教育における今日的課題	98	III 研究の成果と今後の課題	111
2. 研究の意義	98	1. 研究の成果	111
II 研究の内容	100	2. 今後の課題	112
1. 英語科における授業方法の改善	100	おわりに	112
2. コミュニケーション能力の育成を促す「評価」	104	参考文献・指導助言者	112

¹川崎市立今井中学校教諭（主任研修員）

²川崎市立御幸中学校教諭（研修員）

³川崎市立中野島中学校教諭（研修員）

⁴川崎市立高津中学校教諭（研修員）

⁵川崎市総合教育センター研修指導主事

I 主題設定の理由

1. 英語教育における今日的課題

情報網の発達に伴い、いながらにして世界の情報を手にし、仕事を進めていくことはもちろんであるが、コンピューターが家庭へ普及することにより、生活のなかにも情報のネットワーク化が浸透しはじめ、いわゆるボーダレス社会が現実のものになってきている。

こうした世界状況の変化に対応すべく、英語をコミュニケーションの手段として用いることのできる生徒の育成が英語科に求められている。また、英語教育改善の基本方針には、「国際化の進展に対応し、国際社会に生きるための資質を養うという観点から、特にコミュニケーション能力の育成や国際理解の基礎を培うことを重視すること」が謳われている。

英語科では、こうした要請に対応すべく、コミュニケーション能力を育成する努力がはらわれ、たくさんの研究発表も行われてきているが、コミュニケーション能力が育ってきているとは、言いがたい。

コミュニケーション・アプローチは、すでに1980年代に台頭し、現在もこの理論に基づいて、ゲームを取り入れたり、ドラマに挑戦させたりと、工夫されつつあるが、まだまだ文法中心の授業や英文訳読式の授業、あるいは、先生の講義をじっと聴き、ノートを取るといった受け身の授業が多く、文型や文法の規則を覚え込むという知識重視型の学習が行われている。

外国語を学ぶとき、理論的な思考が必要になる。その手助けをするために文法の知識が必要となるが、それを知識のままとどめるのではなく、生きた言葉として使うつまり、「英語をコミュニケーションの手段として使う力」を育成することを考えていかなければならない。

そこで、改めて、コミュニケーション能力の育成とはどういうことを考え、その指導法を整理していくことに取り組んだ。

また、今までの英語の授業では、中学生という年齢にふさわしくない教材を活用していた例もある。他教科とのかかわりも考慮して、年齢にふさわしい学習教材を準備することが、知的好奇心をわきたたせることにつながり、学習意欲の向上にも結びつくことになるのではないだろうか。

目前に迫った21世紀を展望したこれからの教育について、「新しい学力観」に基づき、生徒一人一人の学力をどのように形成していくのが大きな課題である。

また、生涯学習の必要性が叫ばれているが、それは、つまり、自己教育力を育成することであると思う。

授業をすることを通じて、自分のよい面に気づき不足している点を、自ら学習目標に組み入れていくような学

習ができれば、自己教育力にも結びつくのではないか。指導と評価は、表裏一体の関係にあるが、本研究では、「評価」をそうした生涯学習に結びつく足掛かりとなるようなものにしたと考え、取り組んだものである。

2. 研究の意義

(1) 研究主題

コミュニケーション能力の育成を目指して取り組んだ授業が、「コミュニケーション能力」の本質を理解した上で行なわれているのか、もう一度検討する余地があるということで、前研究ではコミュニケーション能力とはどんな力なのかをまず提示した。そして、コミュニケーション能力を育成するための授業方法として「課題解決学習」が提案された。

日本人は、少ない人で3年、大学を卒業した人は、およそ8年ものあいだ英語を学んでいる。しかし、学んだ英語は、コミュニケーションの手段としていかされていない。多くの人が英語を話せたらという思いを胸にしたまま、外国人と接する時、しり込みしたり、言いようのないもどかしさを感じているのである。これは、どうしてなのだろうか。この問題を解決することこそ、現在の英語教育に期待されていることなのである。

では、具体的にどういう授業をすればよいのだろうか。先に述べたように、今までの英語教育で最も欠けていたことは、学んだ言葉を活用するチャンスをあたえていなかったこと、つまり、学んだ英語を総合的に展開させる「場」をあたえていなかったことにあるのではないか。

そこで、できるだけリアルな学習状況を設定し、そのなかで生徒が主体的に活動に参加する、参加せざるを得ないような「場」を作り、授業を行なうことが真のコミュニケーション活動の体験に繋がるであろうと考えた。

「課題解決学習」は、この目標を達成可能にする学習方法の一つであり、前研究で未完成の部分や、さらに改善を加えたいことを取り入れながら、引き続き研究していきたい。そして、活動を通じて生徒に学習への意欲をわきたたせる原動力となるのが、「評価」であり、その効果的なあり方を研究する必要がある。

以上のような理由から、本研究会議では、次のような研究主題を設定した。

.....
コミュニケーション能力の育成に関する指導法の研究

～課題解決学習 (TASK-ORIENTED ACTIVITIES) を
通じて効果的な評価を探る～

.....

(2) 研究の仮説

英語科における課題解決学習がめざすものは、和文英訳的思考や表現形式からはなれ、生き生きとした場面で

主体的な問題意識を持って、問題解決にあたることであり、その形態は、活動中心の学習である。

それは、ことばそのものが目的になる活動ではなく、ことばが手段となり、媒介となる活動なのである。生徒は、「場面→表現内容→表現形式」の生きたつながりのなかで活動することができ、与えられた「場」に相応して自分がそれまでに学んだ英語を、必要に応じて引き出して使うチャンスを与えられることになる。そして、その課題を解決することで、自分で努力して目標を達成できたという大きな成就感を味わう事につながり、さらにそのことが、英語を学習する喜びや、意欲を引きだすことにつながると考える。授業の展開の面でいままでの方法と大きく異なるのは、【key sentence】に相当する英文の提示は全くないこと、そして、どんなアプローチであっても、課題を解決するという目的を果たせばよいので、生徒は自分の力に応じて、様々な表現を駆使してその課題に取り組み、それによって英語を使う必然性を体験することができる点である。

現行の学習指導要領に基づいて発行された教科書ではレッスンごとに、コミュニケーション活動を盛り込むように工夫されているが、それは、あくまでもそのレッスンにおける文法項目の定着のためのゲームやドリルとして設定されたものである。本研究会議では、その枠を乗り越えて、さらに広い意味で活動を図ろうとするものである。課題解決学習のこうした特色は、今まで説明してきたコミュニケーションのとらえ方や、コミュニケーション能力の定義に沿ってコミュニケーション能力を育てることに結びつくと考えた。そして、そうした活動に適切な評価を加えることで、英語に対する関心・意欲も高まり、学習意欲が向上すると思われる。この高まりは、さらなるコミュニケーション能力の育成に繋がるであろうと考え、下記のように研究の仮説を立てた。

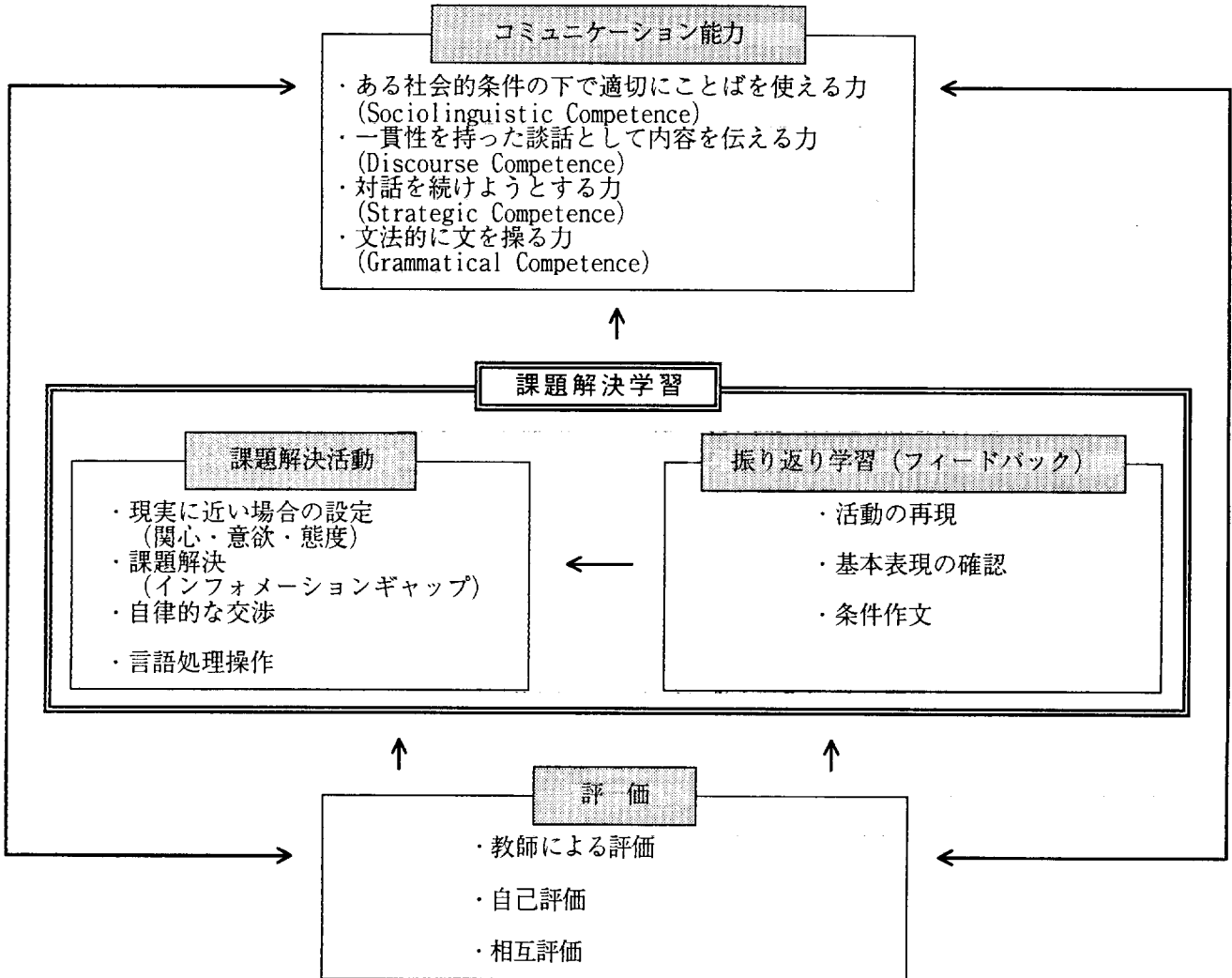
.....

課題解決学習を進めるとともに、そこでの確かな評価を行えば、生徒の学習意欲の向上につながり、コミュニケーション能力の育成をうながすであろう。

.....

(3) 研究の構想

【構想図】



(4) 研究の方法

① コミュニケーションとコミュニケーション能力の関連とその意味を明確にする。

コミュニケーションの概念を明らかにし、目指すべきコミュニケーション能力を具体化して、授業設計にあたる。

② 英語教育の抱えている今日的課題を明確にする。

英語科に求められていることと、現場での教育活動における実情を明確化し、授業方法を検討する。

③ コミュニケーション能力を育成するための授業設計とその実践を行う。

課題解決学習という授業方法を実践するための手だてを、順を追って明確に（プログラム化）する。

この授業における学習の定着化を図るため、フィードバックする方法も検討する。

④ 評価活動の規準を明確にし、分析する。

本研究会議における「評価」のあり方を明確にし、検証授業を通じてその表れを分析する。特に、コミュニケーション能力が、生徒一人一人にどのように定着したのかを、スピーキングテストを実施することで確認し、分析する。スピーキングテストを実施するに当たり、その方法、および評価規準を明確にする。

II 研究の内容

1. 英語科における授業方法の改善

(1) コミュニケーションとコミュニケーション能力

① コミュニケーションのとらえかた

コミュニケーションということばは、既に、私たちの日常生活の中に溶け込んでいる。しかし、改めて『コミュニケーションとは』と問われると、即答に窮する。

よく、コミュニケーションに対して「通信」とか「情報伝達」という訳語が当てられている。『広辞苑』ではコミュニケーションを「社会生活を営む人間のあいだに行なわれる知覚・感情・思考の伝達」と定義している。つまり、ある種の情報が人間のあいだを移動することと理解することができる。

コミュニケーションとは、伝達すべき、あるいは、伝達したい情報があり、その受け手となる相手がいるということは、もちろんである。単に情報の伝達だけでなく、相手に、そのやり取りを通じて、「なんて優しい人なのだろう！」という感動を届けたり、「また話してみたい」という期待を抱かせたり、心から「ありがとう」と言える喜びを体験させたり、すらすら言えない人にはさりげなく必要なことを聞き出す、といった“思いやり”を取り込むことで成立する心の通うコミュニケーションをめざしていきたい。

英語を学ぶことを通じて、そうした心遣いや優しさを交わしあい、相手のよい面を認めることができるように日常の授業と取り組むことが《生きる力》に結びつく学習に発展するのではないかと考えている。

② コミュニケーション能力の定義

さて、こうしたコミュニケーションを成立させるために、[コミュニケーション能力]の育成をはからなければならない。コミュニケーション能力とは、前研究においても指摘されているように、CanaleとSwaineによって提唱された下記の4つの力により形成されることが、ほぼ定説となっており、本研究会議でもこの説にしたがって考えていくものとする。（その後、Canale等の説に修正を加える考え方が、いくつか発表されているが、どれも定説となるに至ってはいない。）

～～コミュニケーション能力～～～～～～～～～～～～～～～～

ア. 文法的に文を操る力 (Grammatical Competence)

イ. ある社会的条件の下で適切に言葉を使う力

(Sociolinguistic Competence)

ウ. 周囲の状況を判断して一貫性のある内容を伝える力
(Discourse Competence)

エ. 判らない言葉や表現があった時、言い換えたり、ジェスチャーなどを用いて対話を続けようとする力

(Strategic Competence)

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

この分析に基づいて、コミュニケーション能力の育成について検討した。そして、課題解決学習(Task-Oriented Activities)を行うことは、英語を実際に使うのにふさわしい状況・場面設定につながり、かつ、上記のコミュニケーション能力を育成する4つの力のなかで、ウ.の談話能力とエ.の方略的能力の育成をはかることに効果があるのではないかと考えた。さらに、課題解決学習(Task-Oriented Activities)を通じて、どのような評価が可能なのかについて研究を進めた。

(2) 談話能力と方略的能力について

① 談話能力・方略的能力と課題解決学習の関連

今までの英語教育をコミュニケーション能力の4つの力と照らし合わせてみると、ア.の文法を操る力については、ふんだんに授業に取り入れられてきている。イ.については、中学生という立場で十分な状況を設定するのが難しいことから授業に取り入れるには、限界があると思われる。残る二つの力である、談話能力と方略的能力の育成をはかるようにすることがコミュニケーション能力の向上に繋がる重要なポイントになると思われる。

「課題解決学習」では、言葉を実際に必要とする状況と、それにふさわしい場面の設定が行なわれる。その活動の中心は、相手と情報のやり取りをすることであり、「話すこと」・「聞くこと」を中心とした言語活動が一

育に展開される。つまりこの学習方法は、今までの英語教育に不足していた『場面(できるだけ現実味のある)⇨表現内容⇨表現形式』を、補充していくのにふさわしいと考え、検証授業に臨んだものである。

② 談話能力と方略的能力のとらえ方

では、どんなことができれば談話能力や方略的能力が育成されたことになるのだろうか？ そこで本研究会議では、それぞれの能力について『～できること』という具体的な行為を取り上げ、その行為が表れたときそれぞれの能力が育成されたものと考えたことにした。以下にそれぞれについて、列挙する。

* 談話能力とは――

- ・挨拶など社交儀礼的な言葉を交すことができる。
- ・知りたいことを尋ねることができる。
- ・欲しいものを説明し、手に入れることができる。
- ・あることを勧誘したりそれに答えたりできる。
- ・あることを提案したり、その事に応えることができる。
- ・あることについて、その可能性を聞いたり考えたりできる。
- ・あることを依頼したり、それに答えたりできる。
- ・あることを指示したり、禁止できる。
- ・自分がしてもらいたいことを相手にしてあげたり、伝えたり、応えたりできる。
- ・自分の感情、考えなどを伝えることができる。
- ・相手の感情、考えなどを尋ねたり、それに応えることができる。

* 方略的能力とは――

- ・会話を円滑に進めるための表現を場面に応じて使うことができる。
(Let me see, Well, Oh, Really, など)
- ・相手の説明に賛同や感動を伝えることができる。
(That's great, Yeah, How nice! Good job, など)
- ・相手の説明が判らない時間聞き返すことができる。
(Pardon? Once more, please. Please speak slowly, など)
- ・相手に伝えたいことがうまく伝えられない時、言い換えたり、繰り返したりできる。
- ・相手に伝えたいことがうまく伝えられない時、ジェスチャー、写真、グラフなどの非言語で要点を説明することができる(説明しようとする)。
- ・相手からの援助を求める(こんな時英語でどういうのか? など) ことができる。

(3) コミュニケーション能力を育成するための課題解決学習のあり方

① 課題解決学習のプログラム化

これから述べる課題解決学習とは、Task-Oriented Activitiesを意味するものであることを明示しておく。

課題解決学習は、教科書を活用しながら進める日常の授業を離れ、生徒一人一人に、ある課題を与え、生徒がその課題を解決するために英語を媒介としてコミュニケーション活動を行うものである。教師は、「どんな課題」を「いつ」、「どのように」提示し、生徒にどのような準備をさせるのかをあらかじめ立案し、しっかりした指導手順を計画書として作成することが必要になる。

そこで本研究会議では、検証授業で取り組んだ課題解決学習を、一つの単元学習としてとらえ、その全容を考案し、その後で指導案の細案作りに着手した。

1. レベル⇨学習時期、活動に必要な文法事項
2. テーマ⇨内容を凝縮した表現
3. タスク⇨課題の内容を示す
4. 活動概要⇨ 課題解決学習での場面、活動内容を生徒の動きが判るように説明する
5. 構成⇨ Key personとなるべき生徒の配置
その他の生徒の配置、場面設定
6. 準備⇨ ワークシート、自己評価カードなどの活動に必要な物品の提示
7. 指導カリキュラム⇨この課題解決学習に必要な未習の単語および語句、表現の配置や擬似言語活動、課題解決学習、評価、振り返り学習、を流れに従って提示
8. 教室配置図⇨ 課題解決学習を行なう時の机・椅子の配置を図示する

以上の8項目で構成し、課題解決学習の全容をとらえやすくする工夫をはかった。私たちは、この作業を「プログラム化を図る」と呼ぶ。

② Let's talkの実施

i) Let's talkの意義

課題解決学習は、英語を使う場面を設定することで学んだ英語を自分で考えて使う体験をさせることを狙いとする学習活動が中心となる。この活動をスムーズに行うために毎日5～6分程度、「Let's talk」と名づけた活動を行った。これは、挨拶・好きなスポーツ・趣味・昨日のことというようなトピックスを用意し、互いに今まで学んだ英語を駆使して相手からの情報を収集する活動である。この活動をウォームアップ活動として位置づけ、毎日の学習に活用した。

③ 「課題解決学習」の実施

前頁のような手順で、プログラム化された学習に取り組み、検証授業(前頁プログラム化7の活動を観察)を行った。平成9年度は、この課題解決学習を4回行った。

No.	実施日	テーマ	課題の内容
1	6・18 (2年)	The Lost and Found	自分の落としたものを遺失物取り扱い所に行き、見つける。拾ってくれた人の名を聞き、お礼に行く。
2	7・9 (1年)	条件にあう人を探す	ALTの紹介した家族と興味や趣味のある人物を友達の家から探し、ALTに紹介する。
3	7・17 (3年)	Special Tours in USA	自分の好みをもとに予算を考えながら、ツアー・宿泊先・航空便を決定し、旅行計画を立て、予算を獲得する。
4	11・19 (3年)	互いの文化を紹介しよう (異文化理解)	ALTと級友に日本の文化を紹介し、自国の理解を深めるとともに、ALTからも彼らの国の文化を紹介してもらおう。どんな事が変わったのかを発表する。

このうち、第1回検証授業のプログラム化と指導案を紹介する。

課題解決学習 No.1のプログラム化

- レベル: 2年前期、特殊疑問文、代名詞、過去形
- テーマ: The Lost and Found(遺失物取り扱い所)
- タスク: 自分の落としたものを遺失物取り扱い所に探しに行き、見つける。拾ってくれた人の名を聞き礼を言う。
- 活動概要: ある日、買物へ出かけ3軒のデパートへ行った。買物中に、財布、傘、上着を忘れて(または落として)しまった。デパートには、2カ所ずつ遺失物取り扱い所がある。そこを一箇所ずつ訪れ、自分が落としたものの形状やどのあたりで落としたと考えられるかなどを説明し、落としたものを捜し出す。落とし物を見つけたら、手続き(身元確認)をし、品物を受け取り、拾い主の名前を聞いてお礼に行く。
- 構成: 遺失物取り扱い所……生徒2名(2名×6カ所)
落とし物を探す人……残りの生徒
落とし物を拾った人……ALT・JTE
- 準備: 財布・傘・上着のカード(それぞれ生徒数×2:落とし主用・遺失物取り扱い所用)
遺失物取り扱い所係官用記録用紙……遺失物取り扱い係官用
拾得者リスト……遺失物取り扱い所
各遺失物取り扱い所の看板地……遺失物取り扱い所
自己評価カードA……遺失物取り扱い所
自己評価カードB……落とし主用
- 指導カリキュラム:
 - ①今回の活動に必要な語で未習のものを練習(物の形・柄・色・場所などに関する語)させる。
 - ②中心となる表現(形・柄・色・大きさなどを尋ねる表現・特殊疑問文・代名詞・過去形など)を課題解決学習を行なう以前の授業のなかで少しずつ復習し、未習の表現があれど教えておく
 - ③財布・傘・上着のカードの作成(それぞれ2枚ずつ色を塗る)
 - ④遺失物係官の生徒に活動概要を説明し、看板を作らせる。
遺失物取り扱い所係官の生徒に擬似練習をさせる。
 - ⑤擬似言語活動
 - ⑥課題解決学習
 - ⑦事後学習(振り返り学習)
 - 自分が使った表現を確認し、発表する。この時、良かった点・他の表現方法・直すべき表現を確認する。
 - 課題解決学習で必要と思われる表現を用いて、リスニングで理解度をチェックする。
- 評価: 自己評価・相互評価・教師からの評価(課題解決学習・Let's talk・振り返り学習・スピーキングテストなどを通じて)
- 教室配置図: 省略

指導案(略案)

1. 実施日時: 1997年6月18日 第5校時
2. 対象学年: 2年2組(男子19名、女子18名)
3. 学習計画: 課題解決活動、指導カリキュラム通り
4. 学習目標: 今まで学習した英語を活用して、生徒が落とし物を見つけ(課題)それを拾った人にお礼を言うことができる。

5. 学習過程

	活動内容	
	日本人教師・ALT	生徒
Warm-Up	・レットトークを用い、生徒同士で会話させる。 ・シールによる評価活動。	・レットトークを行う。
Lost & Found	・教室の6カ所に [Lost and Found] コーナーを設ける。 ・各コーナーには、傘・かばん・コート・ジャケットのカード(それぞれ色・大きさ・柄・などが異なる)を用意する。 ・これからする活動を説明する。 ・ALTと活動内容のデモンストレーションを行なう。 ・遺失物係を所定の位置につかせ、落とし物をした生徒には、その品物を示すカードを渡す。 ・遺失物を探した生徒と会話(お礼)をし、シールで評価をする。	・説明を聞き、モデルとなる活動(デモンストレーション)をみて、活動の内容を理解する。 ・遺失物係の生徒は、各コーナーへ行き、準備をする。 ・落とし物をした生徒は、各コーナーをまわり、自分の落とし物を探す。 ・遺失物を探し当てた生徒は、拾ってくれた人物を聞き、お礼に行く。 ・次の遺失物を見つける活動を続ける。
まとめ	・ALTが、どんな遺失物を見つけたのか、質問をする。 ・自己評価カードを配付する。	・ALTの質問に答え、説明する。 ・自己評価カードを記入し、活動を振り返る。

④ 《振り返り学習》の実施と考察

i) 振り返り学習の意義

課題解決活動においては、生徒は、個々に活動しているので、その学習で大切だと思われる表現や、工夫している取り組みなどを、クラス全員に紹介することができない。また、自分で使った英語が、ふさわしいものであったのかを確かめるといった、フィードバックする時間が持てない。これは、学習を不完全なものにしてしまう要因に繋がる。そこで、その欠点を補う意味で、次の時間に、活動をもう一度再現(教師は、ポイントを整理しVTRを活用)し、学習上大切なことや、仲間の活躍の状況を認めあう時間を確保しようとするものである。

ii) 振り返り学習の内容

以上のような理由で振り返り学習の内容について検討を加え、基本的に、以下のような三つの柱をたてた。

振り返り学習

- ア：活動の再現--- 課題を解決するために必要な表現を確認するとともに、コミュニケーション活動を豊かにする工夫について考えさせる。
- イ：仲間の発表からよい面を引き出す--- 仲間の発表する姿を見て、努力している事を発見させ、認めあう。
- ウ：条件作文--- このタスクを解決する活動を通して場面にふさわしい英文が定着できたのか、確認する。

iii) 振り返り学習の結果

検証授業No1の「落とし物探し」における振り返り学習から3つの作品(上記ウ:の条件作文)を提示する。

[A:英語が得意な生徒]

1. キャスト: レストランの店長→^(遠藤)私 落とし主→^(中井)渡島さん 見つけた人→^(田中)大島さん
2. 場所: ロボットの超高級レストラン
3. 状況: レストランで中井がジャケットを失くした。田中がそれを見つけてくれたので、お礼に10万円をおあげた。すると今度は鍵が失くしてさがしていたら、店長がトイレの近くで見つけてくれた。
4. 見どころ: 物語の意外な展開とおもしろさ。

- A: Excuse me. Did you see my jacket here?
- B: Just a moment please.
- C: Excuse me. Is this yours?
- A: Oh! It is mine! Thank you very much!
I am very happy!
- C: You are welcome.
- A: I give you hundred thousand yen.
- C: May I have this?
- A: Yes, please.
- C: Oh. Thank you very much!
- A: Not at all. Good bye.
- C: See you.
- A: ... Oh no! Oh... Where is my key?
- B: Is this yours? It was near the bath room.
- A: Thank you!
- B: Not at all. Visit us again.

[B:AとCの間に位置する生徒]

1. キャスト: A 太田代(靴をかきいている人) B 春山(靴を見つけた人)
2. 場所: スポーツセンター
3. 状況: トレーニングをしていて帰ろうと思って靴おき場に来たら靴がなくなっていた
4. 見どころ: 泣きながら握手をする所

- A: Excuses me, Mr. Haruyama.
- B: What, Yutaka?
- A: I lost my wonderful shoes.
- B: What color is it?
- A: Black and silver.
- B: What size?
- A: twenty-seven.
- B: What design?
- A: flowery.
- B: What maker?
- A: NIKE.
- B: Oh! Just a moment. Is this yours?
- A: Yes, It is.
- B: Really?
- A: Sure.
- B: Ok.
- A: Thank you very much.
- B: No problem.

[C:英語が苦手な生徒]

1. キャスト: A. 大津(落とし主) B. 田山(Aの友人) C. 寺田(遺失物係)
2. 場所: 馬車・電車の中
3. 状況: Aがかばんを電車の中に忘れてしまい、友人と一緒に遺失物係の所へ行き、見つけてもらう
4. 見どころ: 心配そうに待っている時に「見かた」と言われた時の感激
- B: Arriving at the Yokohama station. Get off.
- A: oh!
- B: what?
- A: I lost my bag!
- B: oh! Let's go to the lost&found!
- A: Yes.
- A: I lost my bag.
- C: What color is your bag?
- A: Brown.
- C: What design?
- B: Solid.
- C: What is in your bag?
- A: Wallet and.....
folding umbrella.
- C: What is in your wallet?
- A: Two thousand yen& telephone card.
- C: Just a moment.
- C: I found it.
- A: Thank you, I'm very happy.
- C: Not at all.

iv) 振り返り学習における考察

ここでは、2～3人のグループによる学習活動を用いた。生徒たちは、協力しあいながら、この学習活動に取り組もうとしていた。

[A:英語が得意な生徒]

- ・自分の気持ちを、できるだけ多く表そうとしている。
- ・May I ~? など新しく学習した表現を活用している。
- ・バラエティに富んだ表現を使おうとしている。

[B:AとCの中間に位置する生徒]

- ・Really?/Sure---などを使うことで、自然な会話の流れを作ろうと工夫している。
- ・あいづち等は多く使われているが、表現が一定の形になっている。

[C:英語が苦手な生徒]

- ・場面設定作りに自主的に参加することで、英語を自発的に発信しようとしたり、感情を込めて表現しようとしていた。

どの領域の生徒もつなぎことばを多く使っていたことや、この学習の狙いの1つであるwhat プラス名詞の表現を身につけたことが提出された作品から読み取れた。また、事前学習で特に取り上げていない表現 (Just a moment など) も、この学習での互いの活動を通じ、身につけたことがわかった。

さらに、実際の場面では使えなかった表現を「振り返り学習」をすることで、どういう表現をすれば良いのかを自分たちで考え、正しい表現を確認しながら (机間巡視している教師に質問するなどすることで) 身につけようと努力した結果が、いくつかの作品のなかに表れている。生徒たちは、課題解決学習での活動を基にして様々なイメージで場面を設定し、学んだ英語を使おうとしていることがわかった。生徒らしい柔軟な発想が、活動そのものを生き生きとさせ、学習を楽しくさせる要因になったものと思われる。

2. コミュニケーション能力の育成を促す「評価」

(1) 評価のとらえ方

現行の学習指導要領では、生徒がこれからの社会において心豊かに、主体的、創造的に生きていくことができる資質や能力を培うことを基本的なねらいとし、基礎的、基本的な内容を重視し、個性を生かす教育を充実させることを目指している。

そして新しい学力観に立つ学習指導において、学習とは生徒の考えや夢や希望などの思いや願いに基づいて生徒一人一人が、自然、文化、社会、人間などと関わりながら自らのよさや可能性を豊かにし、高めていくプロセスであり、それは同時に、生徒一人一人の生き方の中に豊かな心が組み込まれるプロセスとなるものである。

本研究における「評価」とは、こうした学力観をふま

え、学ぶことに弾みをつけることにつながるものにした

いと考えた。つまり、生徒が自分のよさを知る手掛かりとなり、次の学習目標を設定していくための手段となるようにすること、学ぶ楽しさに気づかせること、そして教師にとって、一人一人の学習状況を把握する手段としたいと考えた。そして、自己教育力の育成を目指して、生徒の自己評価活動を重視すること、そのために、自己評価の方法を工夫すること、また、相互評価もできるだけ取り入れることにより、仲間の良い面を引きだす工夫をさせたいと考えた。

(2) 評価の3本柱

本研究会議では、評価を[自己評価]・[相互評価]および[教師からの評価(ALTからの評価を含む)]の3本柱をたてて考えた。

① 自己評価の充実

豊かな学力を育むためにも、自己教育力の育成を大切にしたい。本研究会議では、自己教育力とは、思考力・判断力・分析力・表現力をとりこんだ総合的な能力であろうと考えた。そこで自己評価活動には、こうした視点になるべく取り入れられるように工夫した。

ことばは、本来、主体的、個人的なものであり、自分の思考・感情・希望などと一体化しているものである。従って、ことばと自分との結びつきを大切にすることが必要である。課題解決活動では、生き生きとした場面を設定し、主体的に課題解決にあたるように学習活動を仕組んでいる。そこで、生徒の自己評価についても、どんな目的でどんな課題を解決するためにことばを使ったのかを考えさせるように、その項目作りを考慮した。

新学習指導要領の移行・実施に伴い、観点別評価を基にした学習指導評価の研究がなされ、授業における自己評価の研究も行われた。従って、自己評価を組み込むという取り組み自体は、新しいことではないが、その内容に一定の価値規準を設けたことが、私たちの研究の一つの成果であると言えるのではないと思う。

従来の自己評価では、「～をしっかりと聞こうとしましたか?」とか「～に進んで答えようと思いましたか?」、 「～に積極的に参加しましたか?」という項目で、生徒は、(A はい・B ふつう・C いいえ)という答えを選択するという形式であった。

本研究では、コミュニケーション能力の4つの要素の表れを測ることを根底にして項目を考えた。課題解決学習であることから、始めに、課題解決が成功したかどうかに関わる質問を設定し、Discourse Competence(談話能力)、および Strategic Competence(方略的能力)に関わる項目では、より深く自分を見つめさせることと、そうした力の表れをとらえることを目的に、「～ができ

なかった時どうしたのか」という、一步踏み込んだ質問項目を設定した。さらに、生徒の内的変容を知るために、「感想」を書かせるようにした。

また、生徒の答え方については、(はい・ふつう・いいえ) とか(A・B・C) のように三択にするとどうしても真ん中の(ふつう) を選択しがちであることを考慮して、少なくとも授業の中で自分が、プラスの活動をしたのか、マイナス面の多い活動であったのかを区別させたいと思い、四段階の判定をさせてみた。

さらに、自己評価については、課題解決活動のときだけでなく、毎日のウォーミングアップの活動でも、同じような観点で評価させるようにして、継続して取り組むようにした。結果は、後で述べるが、継続化を図ることは、やはり、生徒の自分を見つめる目を育てるために大変有効であった。

② 相互評価の充実

本研究では、評価を、自己評価・教師からの評価(ALTからの評価も含む)・相互評価の三本だてで具体的に取り組んできた。私たちは、先にも述べたように、自分を知ることで自己教育力を育成し(自己評価・教師からの評価)、仲間の発表を聞くことで、その努力や良い面を発見したり、または、その影で仲間を手伝う姿に気づかせたり、協力することの素晴らしさを体験させ一緒に生きることの素晴らしさに気づかせたいという願いを込めた評価として、相互評価に取り組んでみた。

もちろん、ここには、教師からの評価も加わるが、学習のなかで明確に仲間の良い面を取り出し(自己評価カードに、そうした項目を設定)、全員に紹介するようにした。

例えば、一つの課題解決活動で、「～さんの表現がとても判りやすい。」と仲間から指示されていたことを、自己評価カードのなかにある相互評価の項目を整理して事後学習のなかで伝えるようにしたり、一時間ごとの学習活動で、教師は生徒のそうした姿を評価するように心掛け、シールを渡したり、全員に呼びかけたりした。こうしたことが、授業の雰囲気をよくすることに役立っている。このように、相互評価も、評価の一貫として大切にした。

③ 教師からの評価の充実

自己評価を促進させる意味で、課題解決活動だけでなく、その他の学習活動においてもできるだけ評価を加えるように努めた。評価には、様々な観点があるが、ここで取り上げる評価は、生徒にとっても学習目標を設定しやすくできるように、わかりやすくシンプルな評価にしようとした。そこで日常の授業と関連させながら、次の3つの分野に的をしぼり、評価を構成してみた。

ア. 発音・アクセント・ストレスなどが正確である。
イ. 英文で応答しようとする。→つなぎ言葉の活用
ウ. アイ・コンタクトがとれるなど英語らしい雰囲気
で対応しようとする。

生徒の活動に、こうした観点を見だし、プラスの評価をしていくことに努めた。また、生徒には、評価を意識させ、記録する意味で、ア⇨赤、イ⇨緑、ウ⇨黄色のシールを手渡した。生徒はシールをもらった時、一覧表に貼り、学期末に集計して自分の学習成果について考えさせるようにした。

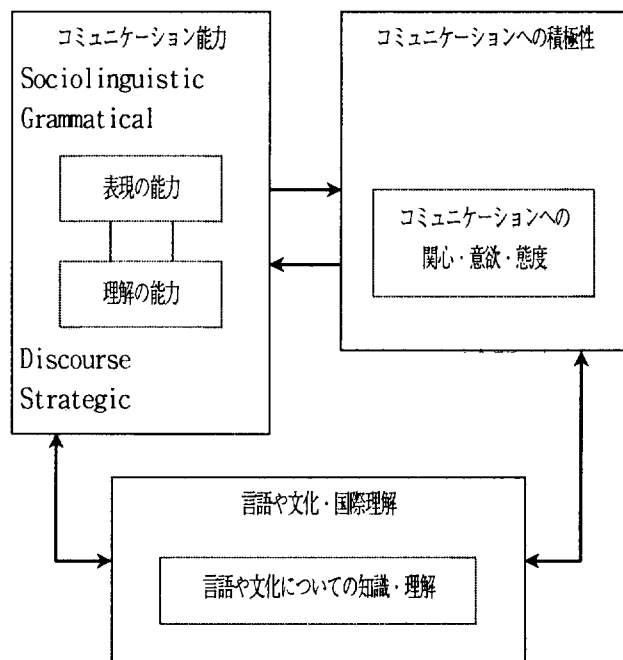
(3) コミュニケーション能力と観点別評価

指導要領の観点の構成要素である「関心・意欲・態度」「思考力・判断力」、「技能・表現」、「知識・理解」は、外国語の観点として、「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」、「表現の能力」、「理解の能力」、「言語や文化についての知識・理解」で表されている。

コミュニケーション能力は、コミュニケーションへの積極性に支えられて育成され、かつ、コミュニケーション能力が高められることが、コミュニケーションへの積極性に寄与するという、相互補助的な関係にある。そして、言語や文化についての知識・理解は、積極的なコミュニケーションを通じて、蓄積されていくものであり、同時に、この知識・理解を積極的に活用してコミュニケーションをより豊かにすることができると考える。

〔表1〕

《コミュニケーション能力と4つの観点の関わり》



(4) 談話能力、方略的能力と観点別評価

ここで、この「談話能力」・「方略的能力」が観点別評価とどのようなかわりを持つのか提示したい。

教師は、学期末に生徒の「評価」作業を行う。この時、必ず観点別評価を行っている。そこで、本研究会議における「評価」が、観点別評価とどんな関係にあるのかを明らかにすることで、この研究が、日頃の評価に結びつくものであり、教師にとってどんな意味を持つのかを提示したいと考えた。

この「課題解決活動」では、活動の大部分を「話すこと」「聞くこと」で占めている。観点別評価では、話すことは⇒「表現の能力」、聞くことは⇒「理解の能力」の一分野にあたる。

そこで、この「観点別評価」と「コミュニケーション能力」における「談話能力」「方略的能力」を合体して考えると以下のような表にまとめられた。(表2参照)

つまり、本研究会議における「評価」は、学期末に行なわれる評定に関わる項目の一つとして、とらえることが可能なのである。さらに、教師にとってこの評価は、生徒をより客観的に理解することにつながると言える。

〔表2〕

		談話能力	方略的能力
理解の能力と	聞くこと	・あいづちを打つ(うなづく)	a 会話円滑に進めるための表現を
		・相手の目を見て話を聞く	b 場面に応じて使うことができる
		・メモを取る	c (つなぎ言葉の活用)
		・相手の説明、質問を理解できる	d 聞き取れないときに態度
		・相手の提案を理解できる	e (ことば)で示すことができる
		・相手の依頼を理解できる	f (聞き返す)
		・相手の感情、考えを理解できる	g
表現の能力と	話すこと	・あいさつなど社交儀礼的なことばを交わせる	h 相手の目を見て話す
		・あることについて、説明できる	i ジェスチャー、写真etcを使い要点を説明できる
		・知りたいことを尋ねることができる	j 相手に伝えたいことがうまく伝わらない時、繰り返したり、言い換えて伝えようとする
		・あることを勧誘できる	k
		・あることを提案することができる	l
		・あることを依頼することができる	m 会話円滑に進めるための表現
		・あることを指示したり、禁止したりできる	n 場面に応じて使うことができる(つなぎ言葉の活用)
		・自分が相手にしてあげられることを伝えることができる	o 相手に賛同や、感動を伝えることができる
		・自分の感情、考えなどを伝えることができる	p 対話相手からの援助を求める(こんな時英語で何というのか? など)
		・相手の感情、考えなどを尋ねることができる	q

(表中のアルファベットは、P108のVTR に対応する)

(5) コミュニケーション能力の育成を促すスピーキングテストの試み

① 目的

- ・日常行っているLet's talkの浸透度をはかる。
- ・コミュニケーション能力を支える4つの力のなかで特に我々が着目している談話能力と方略的能力の育成度合いをはかる。
- ・視点を明確にした評価をはかる。

② 方法と、そのテスト用紙

- ・ALTと二人で、教室とは、別室で行う。生徒は、一人ずつ入室し面接形式で行う。以下に用紙を示す。

Speaking test	Name _____
1. Greetings	(4 3 2 1)
2. Questions and Answers	(4 3 2 1)
3. Talk about something	(4 3 2 1)
4. Attitude	(4 3 2 1)
_____ Comments _____	
_____ Self-Evaluation _____	

③ スピーキングテストにおける評価

i) 評価規準

このテストを行う目的を考慮し、どの先生がテスト官になっても同じようにテストが実施できるようにするために、共通の評価レベルを考案した。

【大きく4段階の評価を行う。】

レベル	評価規準
4	プラスワン活動ができる。
3	相手とのやり取りが英文を用いて正確にできる。
2	応答をするのに、単語やジェスチャーに頼ることが多いが意欲が感じられる。
1	ほとんど、何もやろうとしない。

ii) 生徒による自己評価

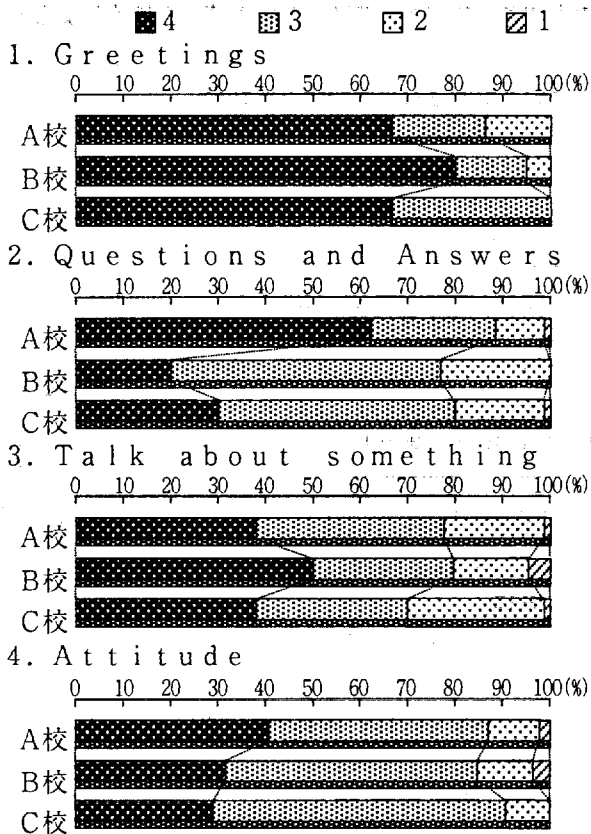
このテストを受けて気づいたことを、文章(日本語又は、英語)で、テスト終了後に書かせた。これを回収して生徒の学習への取り組みの視点がどのように表れているのかを考察した。

④ スピーキングテストの実施結果

i) 結果表示

スピーキングテストは、A校(3年) B校(2年) C校(3年)の3校で行った。以下に結果をグラフ表示する。

〔グラフ1〕【スピーキングテストの結果：一覧表】



ii) 結果の考察

・Greetingsについては、おおむねよくできた。特にC校では、全員がレベル4または3であった。

・今回のテストは、日常の活動状況の定着をみることを目的としていたので、Greetingsの内容もかなりパターン化してしまっている。この項目で殆どの生徒がよくできる原因としてこの点も考慮すべきであろう。

・Q and Aについては、文法的にはほぼ正しく応答できていた(80%)が、会話にプラスワンを付け加えることができる生徒は3校平均、約30%位であった。

・Talk about somethingについては、1つのテーマで、あるまとまりのある話(Discourse)ができる生徒は、約40%くらいであった。しかし、具体的にかみ砕いた質問には、75%位の生徒が答えることができた。これは、自分のなかにコミュニケーションの基本である伝えたい内容を見いだせないことから起こる現象ではないかと思われる。

・今回のAttitudeにおける評価の中心は、Eye contactであったが、ほぼ達成できていた。日常の対話のやり取り練習で、相手を見て話すことを意識づけた成果であると思う。

・Let's talkを開始するにあたり、「つなぎ言葉」を意識して教えた。このテストの中でも、Well, Let me see, Pardon?等を自然に口にできるようになった生徒

が増えたことが確かめられた。やはり、繰り返し練習することが大切であると思う。

・学校間による差が、レベル4と3の区間に見られるが、これは、Let's talkの取り組みの違いによるものではないかと思われる。いずれにしても、4つのテスト項目において、レベル3以上の生徒は、80%程度に達していることがわかる。ここから、談話能力・方略的能力が向上してきていることがわかる。

iii) スピーキングテストにおける自己評価

(3校の、このテストにおける自己評価の感想より抜粋)

[A: 英語が得意な生徒]

- ・相手に判ってもらえるように正確に速く話せるようにこれから努力しようと思いました。
- ・しぐさなど、身体であらわすことができなくて残念でした。繋げて話したりもできたりしたけど文章的におかしいかなと思えるところもありました。
- ・言いたいことが上手く話せなかったが、ずっと勉強してきた英語が、使えるように成ったんだとちょっと自信がついた。だからもっと話せるようにしたい。
- ・少し、英語を話すテンポが遅かったので、次からは、もっと英語らしい英語を話したい。

[B: AとCの中間に位置する生徒]

- ・相手の目を見て話せたのでよかったです。でも、答えが出るまでに時間がかかったので、つなぎことばがもっと使えると良かったと思う。
- ・質問された内容に答えようと頑張った。「えーと」なども日本語でなくWell等を使うようにした。ジェスチャーなども付け、分かりやすく説明しようと頑張った。
- ・緊張したけどやってみてすごく楽しかった。いつものテストは、書いたり聴いたりという方法でやってきたが英語を話すのには、聴くことと話すことが大切だと思うので、これからもやってほしい。
- ・話している単語がわからなければ、意味も判らないので単語ももっと勉強しなくてはいけないと思った。

[C: 英語が苦手な生徒]

- ・アイコンタクトがとれて長くしゃべれたので良かったです、楽しかった。
- ・先生に発音がよいと言われてとてもうれしかった。何かもっと自分で勉強して、質問されても少しは、答えられるようにしておきたい。
- ・習ったことには、ちゃんと答えられた。ちょっと日本語を使ってしまったので、次は、日本語を使わずに話せるように頑張りたい。
- ・3つ目の質問のときに、少し突っかかってしまった。自分では、1・2の質問で先生が言った質問に対して自分からも先生に積極的に質問ができた。

iv) スピーキングテストにおける自己評価での考察

英語が得意な生徒は、英語の話し方・話すスピードの改善といった、より英語らしい表現を求めて学習目標を設定している。AとCの中間に位置する生徒はつなぎことばや単語の大切さに気づき、英語らしい表情にも挑戦しようとする様子が見られた。英語が苦手な生徒については、相手の目を見て話そうとする様子や、英語を使おうとする意欲が見られた。どの領域の生徒からも、このテストを、又やってみたいという前向きな姿勢が読み取れた。

3. 検証授業でみとることのできる生徒の変容

(1) 「談話能力」と「方略的能力」の表れ

VTRで実際に生徒の活動にみられる対話の例を分析してみた。以下に、本年度、第1回目に行った検証授業でのやり取りを提示する。(いずれも、O:はOfficer, C:は、Customerを示す。)

[ビデオ1] *各対話文末のアルファベットはP106の談話能力・方略的能力に対応する [ビデオ2]

O: Sit down, please.	n	C: Excuse me.	h
C: Oh, yes. I lost my folding umbrella.	a/d	O: Yes.	a
O: What color is it?	d/j	C: I lost my jacket.	i
C: Blue and Red---long.	d/i	O: Jacket. What color is it?	B/d/i
O: Long? --- (聞き取れない)	B	C: Red and Blue.	d/i
C: ---		O: What design is it?	j
O: What design is it?	j	C: Solid.	d/i
C: Solid.	d/j	O: How many pockets?	j
O: Where did you find?	j	C: Two.	d/i
C: Bakery.	d/i	O: Two pockets. How many buttons?	B/d/i
O: Bakery? OK, OK. Just a moment.	d/A/B/F	C: Four.	d/i
Is this yours? Is this yours?	j/E	O: Four. What size is it?	B/d/i
C: This, this.	d/D	C: S.	d/i
O: This? This? Just a moment.	j/F	O: What's in the pocket?	j
May I have your name?	j	C: Pocket?	B
C: My name is Rie Yamashita.	d/i	O: What in the pocket?	E
O: May I have your telephone number?	j	C: In the pocket--- A key.	B/d/i
C: 044-822-4355	d/i	O: Only a key?--- (聞き取れない)	j
O: May I have your address? ← (ア)	j	C: Only.	d/i
C: えっ! Pardon?	B	O: Where did you find?	j
O: May I have your address?	E	C: At the music shop.	d/i
C: May I have your address.	B	O: <u>Just a moment.</u> Is this yours?	F/j
O: Address?	E	C: <u>Yes, thank you very much.</u>	d/p
C: Address?	B	O: May I have your name?	j
O: Hisamoto? Futako?	E	C: My name is Rie Yamashita.	d/i
C: Hisamoto.	d/i	O: --- (聞き取れない)	
O: Please show me your ID card.	n	C: 044-822-4355	d/i
C: ID card. (とカードを示す)	d/i/D	O: <u>OK. May I have your address?</u> ← (ア)	a/j
O: OK. --- (聞き取れない) Sign please.	d/n	C: <u>Hisamoto.</u>	d/i
C: sign?	B/d	O: Please show me ID card.	n
O: OK.	F	C: <u>Yeah.</u>	a
C: Who --- (聞き取れない) folding umbrella?	j	O: Please sign here. Thank you.	n/p
O: Mr. John Tapper.	d/i	C: Yeah, yeah, yeah. Thank you.	q/D/G
C: John Tapper? Oh! Thank you very much.	B/p	Who found my jacket?	j
Good-bye.	h	O: Mr. Tapper.	d/i
O: Good-bye.	h	C: Thank you.	h/p

「落とし物探し」という課題を解決しようとして、生徒達は、自分の学んだ英語を場に応じて引き出しながら使っている様子がわかる。

「落とし物探し」という目的に向かって一つのまとまった話が構成されていること、又、先に示した談話能力と方略的能力の分析一覧表の項目にある内容の発話も、検証授業の中で（前ページの対話例参照）認められると言える。

平成9年度に入って、私たちが特に気をつけて指導してきたつなぎことばも、与えられた場面に相応して、取り込もうとしている様子も見られた。生徒たちは、対話と対話をつなぐための表現の必要性を見だし、自然に使うようになってきている。

ここでは、ビデオ1とビデオ2に収録された別々の場面での生徒の対話の一部を載せてみた。ビデオ1では、なくした折り畳み傘を、ビデオ2では、ジャケットを探し出すことが課題である。生徒たちは、この課題を解決するために互いにやり取りをする様子がみられる。この全体が一つのまとまった話であり、対話の流れのなかに談話能力や、方略的能力の表れを観とることができる。

特に、(ア)の部分で生徒は、address という単語の意味がわからない様子が見られる。そこで係官の役割を果たしている生徒が、具体的に地名で質問をすることで相手に内容を理解させている。(方略的能力の活用) また、偶然にもビデオ2に、同一人物のやり取りが記録されていたことから、忘れ物をした役割をしたこの生徒は、単語の意味をここでの体験を通じて学んだことをみとることができる。

つまり、場面があるということは、単に机で勉強している以上のことを、自分で学びとることが可能なのである。そのほかにも、検証を通じて方略的能力の一つであるジェスチャーで伝えようとする様子や、つなぎことばを使う様子がたくさん見られた。

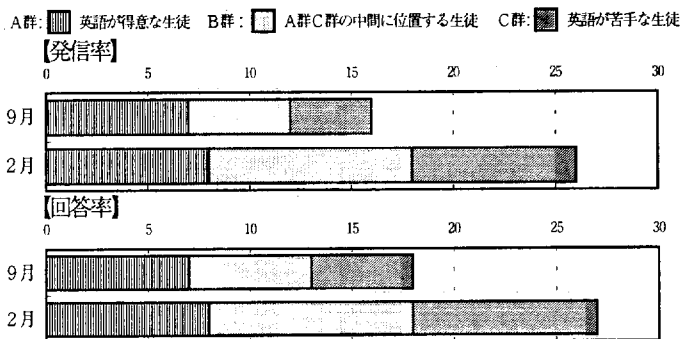
本研究会議では、談話能力を高めるために、いくつかのつなぎことばを教えてきたが、使用度合いは一語で表現できるもの(Pardon?, Well, など)がやはり多く、文章的なものは定着が遅いことがわかった。

(2) Let's talk における変容

談話能力を高めるために、つなぎことばを意識して教えた。このことが、徐々に定着してきて、ウォームアップ活動をスムーズに行う様子がみられた。

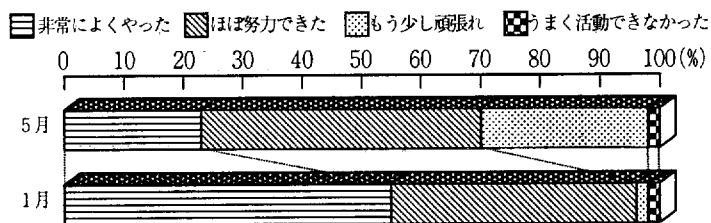
また、初めのころと比べると2学期後半では、とり上げる項目の量や対話のやり取りの回数も増加している。特に、英語が苦手な生徒や、あまり英語を得意としない生徒の伸びが大きく、積極的に取り組もうとする様子がみられた。

[グラフ2] 平成8年度における量的な変化



(10項目の話題のうち、取り組めた話題数の平均値)

[グラフ3] 平成9年度の自己評価における質的变化



平成8年度では、課題解決学習を押し進める工夫の一つとして[Let's talk]に取り組み、生徒がどのような学習を進めていくのかを観ていった。その結果、グラフに示されているように、A群:英語を得意としている生徒は、この学習を始めたときから発信率(自分から相手に質問する)・回答率(相手の質問に答える)ともに高く、時間の経過に伴う変化は小さい。また、B群:A群C群の中間に位置する生徒は、発信率・回答率ともに、ほぼ2倍に増えていた。さらにC群:英語が苦手な生徒は、発信率・回答率ともにほぼ2.5倍まで伸びている様子が読み取れる。約5カ月間の取り組みであったが、この活動が自主的に英語を使おうとする態度や、談話能力や方略的能力を育むのに有効であることがわかった。

平成9年度になってLet's talkの取り組みに質的な向上をはかろうと考え、一つの項目についてやり取りをする回数を記録するようにしてみた。この結果については取り組み方の変化もあり、量的な変化や質的な変化を数字ではかることは、できない。しかし、明らかに、やり取りをする回数を増やそうと努力している様子が見られた。一つの項目について話題を見つけることが、始めは上手にできず、項目が進まなかったが、徐々に仲間同士で相手の話を聞いて、対話を進めることができるようになった。またこの時、[How about you?][Let me see]といった対話をつなぐ表現の工夫もよく聞かれた。

グラフ3は、Let's talkの自己評価の変化をまとめたものである。平成10年の1月には、自己評価C(もう少し頑張れ)の生徒が大幅に減少し、A(非常に良かった)・B(ほぼ努力できた)というプラスの評価をする生徒が、およそ95%まで上昇したことが読み取れる。このことから、この活動

が学習意欲を育む要素になっていると言えよう。

(3) スピーキングテストにおける変容

スピーキングテストを実施した時、自分のテストが終了してから、全員が終わるのを待つ時間を利用して、自己評価に取り組ませた。結果は、本稿107ページに掲載したが、英語に対する興味・関心の程度で、AからCの3つのレベルに分けて提示した。まとめると、次のようなことがわかる。

- ・ 英語が得意な生徒は、つなぎことばや、話すテンポについて自分の目標を設定していこうとしていること。
- ・ どの領域の生徒も、授業のときにいつも取り組んできた、評価の観点を身につけてきていること。これは何を、どう勉強すればよいかを、自分で考えることに繋がり、私たちが目指してきた、自己教育力の育成につながる評価と言えるだろう。
- ・ 英語を苦手とする生徒のなかからも、このテストに対して「楽しかった」という感想や、次のテストに対する抱負が述べられている。これは、やはりコミュニケーション能力の育成に向けて取り組んできた学習が根づいてきたことを意味するものであると思う。

(4) 評価の表れについて

① 自己評価における変化

本研究会議では、自分を見つめる目を育てることを目標に、生徒にできるだけ客観性のある自己評価カードを用意し、記入させてきた。自己評価カードは、検証授業を重ねるごと改良を加え、基本項目を考案したもので、次の6項目で編成した。コミュニケーション能力の育成にかかわる具体的な学習内容が生徒にも分かるようにしたものである。

[自己評価カード作成の基本6項目]

- 課題解決学習での目標達成による成就感に関わる質問
- Discourse Competenceに関わる質問
- Strategic Competenceに関わる質問
- Grammatical Competenceに関わる質問
- 相互評価に関わる質問
- 全体を通しての感想

検証授業No. 1では、eye contactがとれた生徒は、73.9%、相づちを打とうとした生徒は「よくできた(17.4%)、だいたいできた(52.2%)」とプラスの評価をした生徒が69.6%、さらに、Strategicに関わる部分で相手の言っていることが判らないとき、聞き返した(52.2%)、ジェスチャーを使った(7.4%)、日本語を使った(17.2%)、何も言わなかった(2%)、相手のことばが判った(21.1%)、というように、大まかに言うところ6割の生徒にコミュニケーション能力の高まりが見られる。この傾向は、他の2校での検証授業でも、ほぼ同様であった。

[表 3] 検証授業No.1における自己評価カードA
落とし物を捜そう (落とし主用)

Class: _____ No: _____ Name: _____
(各項目の文末 i ~ vi は、左段下の6項目に対応する)

1	どんな遺失物を見つけたか	i	A 財布 B 傘 C ジャケット、レインコート
2	拾った方にお礼を言ったか	ii	A 挨拶をし、名のみ、お礼を言い、自分の気持ちなどを表現することができた。 B 挨拶をし、名のみ、お礼を言えた。 C お礼だけ言った。
3	何軒の遺失物取り扱い所を回ったか	i	_____ 所
4	遺失物について正確に相手に伝えられたか	iv	A B C D
5	英文で対応(表現)しようとしたか	iv	A いつも英文で対応しようとした。 B できるだけ英文で対応しようとした。 C 時々英文で対応しようとした。 D ほとんど単語での対応になってしまった。
6	相手の言っていることがよくわからないとき、どうしたか	iii	A 聞き返した。 B ジェスチャーで表現した。 C 何も言わなかった。 D 日本語を使った。 E 相手の言うことは、ほぼ理解できた。
7	相手に自分の言っていることがわからないとき、どうしたか	iii	A 他のことばで言い換えた。 B 同じことばを繰り返した。 C ジェスチャーで表現した。 D 何も言わなかった。 E 日本語を使った。 F 相手に自分の言いたいことは、ほぼ伝えられた。
8	相手の顔を見て話したか	iii	A B C D
9	どの係官がわかり易い質問をしたか	v	
10	どの係官が英語らしい雰囲気に対応したか	v	
感想			vi

又、感想の欄には、次のようなことが書かれていた。

[A: 英語が得意な生徒]

- ・ すごく楽しい。もしデパートで落とし物をしたら今日使った英語で話してみよう。 タッパー先生の前だと、ことばが浮かんでこないときもあったけど、楽しかった。英語が楽しくなってきた。
- ・ 一言で言うと楽しかったです。 私も最初は、戸惑ってきちんとてきぱきいかなかったことも、少しありましたが、慣れてきたら、何とかできました。やっぱり、対応した人のなかには、黙り込んでしまう人もいたけれど、先生の言うとおりに他の言葉や、同じことばを繰り返す、ジェスチャーも少し使ったら段々話してくれてホッとしました。またやりたい。
- ・ タッパー先生にお礼をするときに、ものすごく緊張した。ちゃんと気持ちが伝わったらしく、金のシールがもらえた。英語で話すのが楽しくなりました。 うふ!

[B: AとCの中間に位置する生徒]

- ・途中で英語をまちがえてしまったから、今度は、まちがえないようにする。――シールが欲しいよ!
- ・良くしゃべれるって褒められた。うれしかった。英語が好きになった。
- ・判らないことがあったとき、繰り返して言えたり、切り返して言ってくれたりなどして、聞き取ることができました。自分が落としたものがどういうものかが伝わってよかったです。見つけられたときは、嬉しかったです。Mr. タッパーから、金シールをもらったときも嬉しかったです。

[C: 英語が苦手な生徒]

- ・今日は、ほとんど英語を使ったからよかった。 だけど赤色のシールだったから悔しかった。
- ・なるべく英文で話そうとしたけど、あまり英文では、話せなかった。 だけど、楽しかったです。
- ・最初は良く判らなかつたんだけど、でもみんなのを見ていくうちに、わかってきて、面白かつたけど時間がなくて、金のシールとかがもらえなかつた。 悔しい!
生徒の感想から、課題解決学習は、「又、挑戦してみたい」という学習意欲をわきたたせる学習活動であることが、わかる。しかも、英語を苦手とする生徒も、かなり多くの生徒が、「楽しかった」と答え、次の活動を楽しみにしていた。この点は、「課題解決学習」を行うことの大きな利点であると言える。

② 相互評価における変化

はっきりとした数字で現れたものはないが、教室のなかで、たとえば、シールを渡したときに、「先生、僕より、～さんのほうが内容が充実しています。」と仲間を推薦したり、グループ活動も、助け合ってやろうとしている様子が見られる。相互評価は、学習の雰囲気や温かなものにしていくことに効果があると言える。

また、仲間の発表を聞く時、一つ一つのことを注意してみたり聞いたりするようになってきている。共に学ぶ意欲を身につけつつあると言えるのではないだろうか。

③ 教師からの評価における変化

毎日の活動で、教師は、なんらかの言葉で生徒に励ましを送っていると思うが、これは、形として残らない。そこで、どんな所が良くできているのか、英語の学習を進めていく上でどういうことに気をつければ良いのかを知る手段にしてほしいという点から、3種類のシールをわたしているが、まだ、期間が短く、はっきりとした結論はでていない。ただし、生徒は、シールをもらうことを一つの励みにしていることが、感想に表れている。さらに、シールを色別したことでどんな意味があるのかを生徒は、意識していることも確認できた。これは、はじめのもくろみが、良い成果をもたらしたと考えられる

のではないだろうか。英文をもっと覚えたい、単語の学習が不足している、つなぎことばを使おう、といった具体的な記述をする生徒がおよそ60%にも及んだ。

Ⅲ 研究の成果と今後の課題

1. 研究の成果

(1) 課題解決学習における成果

① 自発的発話の増加

- ・Let's talkの継続により、場に応じて必要な英文を自分で考え、使おうとする姿勢が身についてきた。
- ・課題解決学習をプログラム化し、英語を総合的に学習させる場を生徒に与えた結果、生徒達は、モデルとなる英文の提示なしに自発的な発話を行い、互いに情報のやり取りをするようになった。

② 学習意欲の向上

課題解決学習をプログラム化し、生徒に自主性を持って学習させ1るように配慮した結果、リアルな場面のなかで生きた英語を使う楽しさを知り、学習意欲を向上させることができた。

③ 課題解決学習のカリキュラム化の開発

1年から3年まで各学年で、課題解決学習による授業を行った結果、課題解決学習をカリキュラム化する見通しが立てられた。これを具体化し、課題解決学習を年間計画に位置づけることで、より豊かなコミュニケーション能力の育成がはかれるであろう。

(2) 評価における成果

① 日常における評価活動の工夫

評価の3本柱をたて、日常の授業のなかでの評価活動を生徒に見えるように工夫した結果、生徒の学習意欲が向上した。

② 自己評価活動の充実

コミュニケーション能力の定義に基づき分析した評価項目を考案し、自己評価活動に盛り込んだ結果、生徒が何を学ばばよいのかを意識するようになった。また、学習意欲が向上している様子が観られた。

③ 相互評価の充実

生徒の活動に対し、常に良いものを全員に紹介し認めあうようにして授業に取り組んだ結果、共に学ぶことの楽しさを共有する雰囲気が生まれた。

④ スピーキングテストにおける成果

i) 評価規準の設定

- ・話すことが重視されてきたが、その評価については、ほとんどされていなかった。ALTとともに、話すことにおける評価をスピーキングテストとして実施できた。
- ・テストを行うにあたり、評価規準を考案し、客観的に評価できるように配慮した結果、何ができればよい

のかを、生徒も知る手がかりを得ることができた。

ii) 学習意欲の向上

スピーキングテストを行った結果、このテストを又やってほしいという要望の声を多くの生徒が発している。これは、筆記テストは苦手でも話すことに対して目標を持って学習しようとする生徒の意欲の表れと受け止めることができる。

2. 今後の課題

(1) 課題解決学習への取り組みについて

① 課題解決学習の質の向上とカリキュラム化

課題解決学習では、「課題」そのものの質が活動の是非を左右する。生徒の生活実態に適応した良い課題を考案し、プログラム化したい。さらに課題解決学習のカリキュラム化に取り組み、3年間を見据えた指導計画を立案していくことが必要であろう。

② [Let's talk]の運用における工夫

[Let's talk]を毎日続けることで、やり取りの項目数や、生徒の自発的な発話も増加していることがわかった。3年間を見通し、スパイラルな学習ができるように、活動の取り組み方と活動内容の両面からの工夫が必要であろう。

③ フィードバック学習の保障

本研究会議では、「振り返り学習」という名前を付けフィードバック学習を行った。できれば、学習を進行させながらこの活動を取りこみたいと考える。その学習方法を、再検討したい。

(2) 評価に関する取り組みについて

① シールの活用の仕方

教師からの評価活動で、3種類のシールを準備して、授業に取り組んだ。一斉活動のなかで生徒にシールを渡すには、把握できる活動に限界があり、平等性に欠ける。上手に活用する方法を考案したい。

② スピーキングテストの取り組みについて

スピーキングテストを実施するには、一人3～5分必要である。ALTと2人で取り組んでも40人学級では、約60分必要となる。英語科全員で互いに助けあってテストに臨むとか、放課後、終了していない生徒がテストを受けることができるように、全職員が、この学習に共通の理解を持てるよう配慮するなどして、必要な時間を確保する手だてが必要である。

おわりに

コミュニケーション能力の育成という課題を掲げてから、どのように授業をしていくことが、その目標を達成することになるのか、試行錯誤を繰り返してきた。

授業を終えて、生徒が、目を輝かせて、「先生、次はどんなことをするのか?」と聞いたとき、授業をすること

の喜びを感じた。それは、生徒を机の前に縛りつけて一方的に、教師が知識を教え込むことからは生まれないものと思う。課題解決学習を行なうことは、まさに生徒と共に、その喜びを体験することでもあった。

最後に、この研究を進めるにあたり、ご多忙中にもかかわらず、ご指導をいただきました多くの先生方をはじめ、各所属校の校長先生ならびに教職員の皆様、ALTの方々に心より感謝申し上げます。

【参考文献】

デイビッド・ヌーナン

『Designing Tasks for the Communicative Classroom』
CAMBRIDGE UNIVERSITY PRESS 1993年
ダグラス・ブラウン

『Principles of Language Learning And Teaching』
Prentice Hall Regents Englewood Cliffs 1994年
ジャック・リチャード

(フレッド・ジェネシー, ジョン・アプチャー)

『Classroom-based Evaluation in Second Language Education』CAMBRIDGE UNIVERSITY PRESS 1996年
小笠原 八重 (訳) (Keith Johnson/Keith Morrow)

『コミュニカティブ・アプローチと英語教育』
桐原書店 1984年

佐野正之, 米山朝二, 松沢伸二

『基礎能力をつける英語指導法』
大修館書店 1988年
文部省

『コミュニケーションを目指した英語の指導と評価』
開隆堂出版 1993年

松畑熙一『英語コミュニケーション能力評価実例辞典』
大修館書店 1994年

鈴木浩之

「コミュニケーション能力の育成に関する指導法の研究
-----課題解決活動を通して

コミュニケーション能力を育てる-----」

川崎市総合教育センター研究紀要9:35-54. 1996年

【指導助言者】

神奈川大学講師 高橋 一幸

前川崎市立中学校教育研究会英語科部会長 菊池 武熙
(川崎市立南大師中学校長)

川崎市立中学校教育研究会英語科部会長 江幡 淳
(川崎市立今井中学校長)

川崎市教育委員会指導主事 鈴木 浩之

川崎市総合教育センター 教科教育研究室室長

石原由美子

元川崎市立中学校教育研究会英語科部会長 早川 栄一

(川崎市総合教育センター 教育相談員)